様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８４８４

研究課題名（和文）テクストの分節と階層化を考察基盤とする書記コミュニケーション史の構築

研究課題名（英文）Construction of writing communication history based on consideration of segmentation and layering of text.

研究代表者
鈴木　広光（Suzuki, HIromitsu）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：７０２２６５４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語のテクストを分節、階層化する諸要素の史的展開を明らかにしようとするものである。それを明らかにするために、書写や印刷・出版などテクストの供給と、読書の場、読者層、読み方などテクストの需要との相互影響関係と関連付けて解釈する。そして、新たな書記コミュニケーション史を構築するための一つの視座を提示することを目的とする。本研究で明らかになった成果は以下の通りである。(1) 句読点、段落、章節のみならず、文章の表記に使用する文字の使い分けも、テクストの分節と構造化に関与している。読者はこれらの要素によって意味解釈を統御される。(2)一方で、句読法の標準化にテクストの意味解釈が関与している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で句読法の歴史的展開を明らかにしたのは、読むことと書くことの本質を考えるためである。私たちは読むとき、自分では意識していないけれども、句読記号や改行、章立て、タイトルなどの形式や様式によって意味解釈をコントロールされている。そうした形式や様式がどのような過程を経て成立したものであるのかを、技術やメディアのあり方との相関から考えることは、電子テキストが中心になりつつある、現代の過渡期的な書記コミュニケーションにおいて、どのような様式や形式がより適切なものであるのかを考える上で有益な視座を提供するであろう。これが本研究成果の学術的及び社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the historical development of various elements that segment and layer Japanese text. In order to clarify this, we interpret it in relation to the mutual influence relationship between the supply of texts such as transcription, printing and publishing, and the demand for the texts such as the place of reading, the class of reades and the way of reading. Then, it aims to present one viewpoint for constructing a new history of writing communication. The results of this research are as follows. (1) Not only punctuation marks, paragraphs and chapters, but also the proper use of the letters used in the notation of the text is involved in the segmentation and structuring of the text.The reader is governed by these factors in semantic interpretation.(2) On the other hand, the semantic interpretation of texts is involved in the standardization of punctuation.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学　日本文学　分析書誌学　印刷史　書記様式　句読法　パラテクスト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は基盤（C）「分析書誌学と出版史的方法による近代日本における書物の制度化の解明」（2013～16 年度）の成果として、明治期活版印刷物の版面を構成する諸要素のうち、テクストを分節し、階層化する句読点・括弧類・インデントが標準化するのは、印刷書体がジャンル・文体を表象することがなくなり、テクストが純化された「情報」のみを現前化させるようになった明治 20 年代半ば以降であることを明らかにした。活版印刷以前の版本にインデントはなく、句読点使用も散発的であったばかりか、元来、句読点はテクスト享受者が読解の痕跡として残しておくものであった。ここから、句読点が読書行為に属するものであったならば、書記においてテクストを分節・階層化する要素や指標は何だったのか、句読点の使用が享受者から供給側に移ったのはなぜか、版本での使用は特定のジャンルや書肆に限られていたが、それは何を意味するのか、という問いが、導かれる。このような句読法の史的展開や版面における階層の視覚化を、テクストの享受と供給との相互関係まで含み込んで動態的に把握するためには、文字表記論を越えて、書物史、読書史、印刷技術史、タイポグラフ史を架橋する新たな枠組み＝書記コミュニケーション史を構築する必要があるのではないか。と構想した。以上が研究開始当初の背景である。

その構想が学術の現状においてどのような位置を占め、どのような意義を有するのかを示すためにまず参照したのは、2000 年以降盛んになった、漢字圏における「訓読」という営為の本質とその文化的意義を問う学際的研究である。中国、朝鮮半島、ベトナム、日本の各フィールドから思想、文学、言語などの多様な分野の研究者が参加し、漢文訓読が各地域でどのように展開し、言語文化にどのような影響を与えたのかを明らかにするなど注目すべき成果を示している。日本の句読点も漢文訓読の場で使用された句切点を起源とするので、訓読が日本語書記に与えた影響という観点から論じることが可能である。ただし、句切点が訓読という限定された場を離れて、句読点使い分けという形で日本語書記体系に組み込まれ、〈書く〉ことと〈読む〉ことのあり方を変容させた過程を明らかにするには、印刷出版に伴う読者層の変容と版面構成の要請する読書形態の変化、テクストにおける物質性・身体性の希薄化とそれに替わる視覚の専制化まで視野に入れて論じなければならない。このような視座から必然的に、技術史、美学・デザイン学、言語行為論などを包含した、より学際性の高いコミュニケーション史が構想できるのではないか、という目論みのもと、研究計画が策定された。

本研究の参照したもう一つの学的背景は、連続記法から分かち書きへの変化という古書体学の成果が中世西欧における異文化接触および精神革命と関連することを論じた Paul Saenger (1997) *Space between words* である。Saenger の成果は、日本における万葉仮名から連綿／分かちを旨とする仮名への変化と日本語書記の背後にある文化事情を考察する上で有益であった。また近代活版印刷術の導入に伴う句読点の使い分けの標準化については、活字印刷も句読法の規則化も近代西欧の影響が色濃いことを鑑みて、M.B.Parkes (1992) *Pause and effect; Punctuation in the West* が明らかにした句読法の標準化の過程に見られる記号の意味の変容や読書形態の変化も参照して研究を遂行した。これら西欧の写本学、書物史、読書史の成果との比較対照を通して、日本語書記テクストの様式および供給・享受のあり方に独自性が見出だし、西欧側のディシプリンに新たな枠組みや視座を提供したいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、日本語のテクストを分節、階層化する諸要素の史的展開について、その背景にあるテクストの供給（書写、印刷出版など）と享受（享受の場、読者層、読み方）の相互影響関係などの文化的事象と関連付けて解釈することによって、新たな書記コミュニケーション史を構築するための一つの視座を提示しようとするものである。

現代日本の書記言語において句読点、括弧類、改行後の行頭の字下げ（インデント）は、文、文章を分節し、文構造や言述の質的相違の階層を可視化することによって、テクストの指示内容を統御する機能を有する。これらテクストを分節する諸要素の使用は、明治の活版印刷術導入後、言文一致体の成立とともに標準化されたもので、近世版本では用いられるジャンルや書肆に偏りがあり、決して一般的ではなかった。句読点は漢文訓読の句切点を起源として、学問の場で使用されるようになったが、テクストの享受者が読解の痕跡として残すもので、供給者の側がこれを付すことはなかった。

（１） 句読記号がテクストに付されなかった写本や版本において、テクストを分節・階層化する要素が何であったのか。文体を特徴づける定型的な語句の使用（文末詞・指示詞など）や、写本の記載様式の様態を記述し、その機能を考察することで、この問題を明らかにしたい。

（２）句読記号がテクストの享受の場を離れて、テクストを供給する側によって付されるようになった契機は何だったのか。さらに進んで、〈読む〉ための補助記号から〈書く〉ために書記体系に組み込まれる過程を明らかにするためには、言語研究における文字表記論を越えて、読書史、出版流通の知見を参照しながら解釈する必要がある。

（３）〈読む〉ための句読記号が書記体系に組み込まれ、さらに他の記号類やインデントと併用　　されて、テクストの階層性を可視化するようになったとき、〈書く〉〈読む〉という営為はどのように変容したのか。

３．研究の方法

研究目的に記した問題設定に基づき、以下の諸点を明らかにすることとし、この指針に基づいて、具体的な研究方法を策定した。

（１）テクストの分節指標の種類と表記、文体、ジャンル、テクスト形態との対応関係を明らかにする。以下に研究方法を記す。

①　表記、文体、ジャンル、形態（文書か書物か、写本か版本かなど）、制作年代など属性の異なる資料をサンプルとして選定する。同一テクストであっても、形態の異なるものがあれば、積極的に選定して、属性による差異を見極めやすいように配慮する。

②　資料の紙面、版面に観察される分節指標について、それが記号類（句読記号、括弧類、段落記号）か、文字の連綿や肥痩などの視覚的要素か、文体に応じた定型語句かを各々記述し、分節指標とテクストの属性との対応関係を探るため、ボーリング調査を行う。

③　テクストの属性と分節指標との間に対応関係が認められる場合、その関係の意味が文字表記の特性、文書・書物の制作目的、流通形態、享受の様態など、書記コミュニケーションのどのレベル、あるいは具体的な場に起因するのかを考察する。

（２）テクストの階層と秩序を視覚的に投影したレイアウトとテクストの属性との対応関係を明らかにする。以下に研究方法を記す。

①　同じ資料について、サイズ・書体の異なる文字の配置の仕方、記載順序による階層性表示等の観点からレイアウトの類型を記述し、テクストの属性との対応関係を探る。

②　レイアウトの各様式（記号類の使用も含む）がテクストの指示内容をどのように統御して、「情報」化しているのかを明らかにする。このテクストの指示内容の統御が供給者側のどのような制作意図に基づくものか、また享受者の意味解釈にどのような作用を及ぼしているのかを言語行為論と書物史の双方の観点から考察する。

③　テクストの分節、階層化の史的展開を総合的に考察し、新たな書記コミュニケーション史の枠組みを構築する。その際、西欧の写本学、書物史、読書史の知見を参照し、比較対照することによって、本研究構想の独自性を確認する。

４．研究成果

本研究は以下の三つのテクストを主な分析対象とし、研究方法で示した方法に則り、研究目的に示したことを明らかにした。

（１）メディアの転換期にあたる明治前半活版本の版面構造と意味解釈の関係について、解釈可能性とその統御の在り方を、末広鉄腸の「夢ニナレナレ」（『朝野新聞』連載記事）と単行本『二十三年未来記』の比較分析をケース・スタディとして取り上げて、モデル化を試みた。経緯と成果は以下の通りである。

①　テクストの分節指標の種類と表記、文体、ジャンル、テクスト形態との対応関係を明らかにするために、文書か書物か、写本か版本かなど、制作年代など属性の異なる資料をサンプルとして選定し、資料の紙面、版面に観察される分節指標について、それが記号類（句読記号、括弧類、段落記号）か、文字の連綿や肥痩などの視覚的要素か、文体に応じた定型語句かを各々記述した。特に、分節指標とテクストの属性との対応関係を探るため、日本で句読記号が使い分けされるようになった明治 17 年から 25 年くらいまでの出版物を中心に選定して、ボーリング調査を行った。同一テクストを比較することで、諸特徴や属性による差異を見極めやすいように考えた結果、中心資料として、末広鉄腸の『二十三年未来記』を定めることとした。当該テクストの『朝野新聞』初出の連載記事や明治 19 年の際の夥しい数の版には句読点使用はないが、江戸版本から明治活版本への移行期にあたり、一つのテクストが複数の表記体と文体とで表現され、前時代の複数のジャンルが同居していることから、表記によるテクストの分節構造化の様相を観察しやすいこと、連載記事と単行本という物質的形態の違いが、版面構成や構テクストの階層構造に反映し、享受者による意味解釈に影響を与える可能性が高いことを予測できたことによる。

②　連載記事がもとであったために版権がなく、単行本による翻刻本が明治 19 年 5 月以降の半年だけで夥しく刊行された『二十三年未来記』については、書誌、印刷史的知見とパラテクスト的諸要素との関係について考察を行ない、テクストの分節という広義の句読法を考える上での基盤とした。特に刊記が同一でありながら、数多くの異版がある精文堂第四版の整版工程を版面の精細な観察によって明らかにした。数多くの異版出来には紙型が関与しており、この技術は版の保存よりも複製のしやすさがまず重視されていたことも明らかにした。

③　明治 18 年 11 月に『朝野新聞』で「論説」として連載された「夢ニナレナレ」について、記事の各回における分節指標と階層化と意味解釈統御の関係を分析した。結論を先取るならば、当該テクストは日毎に異なる趣向で書かれている。まず、明治二十三年という

未来の論説、傍聴筆記、雑報といった様々な記事を、現実の新聞を通して明治十八年の読者に読ませるという仕掛けを基本に、そこに論評する人物たちの談話を絡ませ、滑稽本をはじめとする江戸の俗文芸以来の手法や表記法まで取り込むことで、記事はヴァラエティに富んだものとしている。このような工夫は、連載記事の読者を飽きさせないように、また日毎の記事の独立性をある程度保つために行われたものである。このようなテクストの特性や目的は、日刊連載記事という物理的形態を前提し、テクスト享受のあり方＝「読み」を統御している。それを担保するのは、漢字片仮名交りと漢字平仮名交りの二つの表記体が同一テクストに同居し、それがテクストの分節し構造化していることである。各回の記事はそれらを巧みに配置し、テクストと読者との位置を統御している。しかし、このような特徴は、『二十三年未来記』に単行本化されると変化し、テクスト構造は統合的なものとなる。そこで、テクストの分節を指示し、読み方をコントロールする方法として単行本には、鼇頭に評語が付された。これが「批評の言語」として文、文章、テクスト全編に渡って意味解釈を言語行為論的に統御するという機能を担うことになる。しかし、版を重ね、精文堂第四版のように版面に本文を詰め込む組版になることによって、本文と評語との対応関係はずれることになり、この機能は失われてしまった。評語は明治の活版本にしばしば見られ、読者による意味解釈を統御していたが、明治も後半に入ると次第に見られなくなり、句読記号やインデント、章立て等にその機能をゆずるようになる。
④　読者による意味解釈に関与する要素には、句読法や表記による分節、構造化とともに、パラテクストがある。単行本化にあたって、テクストが物理的形態を纏い、書物としての統一性を表現するために、書名、序、口絵等のパラテクスト的諸要素が付与されたが、分節による意味統御とは対照的に、パラテクスト的諸要素は、例えば「未来記」という書名が読書との間に築いていたコードや、テクスト外の文化的コンテクストを呼び込む可能性が高まる。すなわち、一つの意味解釈に導くべく付与されたパラテクストが、多様な〈読み〉の可能性が生成する装置になっていることを明らかにした。

（２）明治における句読点の使い分け定着までの過程を実証的に解明するために、ローマ字書き日本語文の分析を行った。日本近代における句読法の確立については、その要素の一つとして欧文のパンクチュエーションの影響が指摘されてきたが、その具体的過程の実証に乏しかった。そこでローマ字による日本語表記を提唱していた羅馬字会の機関誌 *Romaji Zasshi*（明治 18 年 6 月―明治 22 年 5 月）を入手し、句読法が未だ確立していない時期のローマ字書きの日本語の文章における「, ／. 」の使用法を調査した。その結果、「, 」は複文、重文における使用がほとんどで、論理関係を明示する欧文の使用法に準じているが、強調や間に関わる使用は見られず、修辞ではなく論理を視覚化することに重点が置かれていることが確認された。ただし、この方針が漢字仮名交じりの文における句読法の確立とどのように交渉するのかは今後の課題として残ったため、このテーマに関する成果の公表を期間内に行うことはしなかった。

（３）　日本語書記史における句読法と対照するための欧文の句読法史については、既に研究蓄積があるが、研究代表者も独自に同一テクストがどのように句読法によって分節化され、構造化されていく過程を解明することにした。対象資料として聖書に次いで良く読まれ、インキュナブラ以降刊本も多い *De Imitaitone Christi*（キリストに倣いて）の 15 世紀後半から 17 世紀半ばまでのラテン語、イタリア語、スペイン語刊本を調査し、年代、言語、書体、出版地、版型（享受形態に関与する）による違いを調査することにした。筆者架蔵の刊本６本については、句読記号使用の確認を厳密に行なうため、デジタル画像に収め、画像を拡大して調査する態勢を整えた。その結果、次のような成果を得た。
①　15 世紀後半はゴシック体であったが、16 世紀に入りローマン体で組まれるようになる。ローマン体に変わるとき、ゴシック体の版面でよく見られた写本の名残の省略文字が廃棄されていき、代わりに異なる複数の書体を組み合わせることで表記によるテクストの分節が図られた。また句読法が標準化されていく過程が観察された。特に 16 世紀後半から 17 世紀にかけては、節に細かく分節され、されに段落分けもなされ、インデントも徹底化される。テクストは視覚的に構造化され、細分化される。これは、「キリストに倣いて」の判型が小型になることと軌を一にするが、その背景にあるのは出版による読者の増大である推測される。従来の読者層には必要のなかった視覚記号やテクスト細分化、構造化は、新たな読者層の読み方、利用の仕方をコントロールするものであったことが明らかになった。
②　例えば 16 世紀初頭までは接続詞 tunc で始まる節が四つ連続する一つの文として組まれていた箇所が、接続詞の前に「, ／　;」の句読記号を付して区別したり、Tunc…のように別の文として区別するようになる。すなわち、同じ接続詞を連続するリズム的な修辞から、意味論理関係を視覚化する表記法への転換が見られるようになる。この転換の背景には、ラテン語版に先立って、スペイン語訳、イタリア語訳に見られることから、翻訳による意味論理解釈が、ラテン語の組版に影響を与えている可能性があることを明らかにした。この成果は近く、日本語の句読法と比較対照する論文にまとめて公表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 鈴木広光	４．巻 52－2
２．論文標題 活字文献学考：書体意識の生まれるところ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木広光	４．巻 47
２．論文標題 複製技術時代の書物のアイデンティティ－末広鉄腸『二十三年未来記』の場合（下）－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 叙説	６．最初と最後の頁 221－238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木広光	４．巻 46
２．論文標題 複製技術時代の書物のアイデンティティ－末広鉄腸『二十三年未来記』の場合（中）－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 叙説	６．最初と最後の頁 1－23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木広光	４．巻 45
２．論文標題 複製技術時代の書物のアイデンティティ　－　末広鉄腸『二十三年未来記』の場合（上）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 叙説	６．最初と最後の頁 1－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考